

文学・哲学・言語

keyword

- 上代日本文学
- 和歌
- 歌謡
- 『万葉集』
- 『古事記』



井ノ口 史
Fumi Inoguchi

教育学部
准教授

【プロフィール】

- 専門分野
上代日本文学
- 略歴
 - ・2000年3月
奈良女子大学大学院
博士課程修了(博士(文学))
 - ・2000年4月-2013年3月
佛教大学非常勤講師
 - ・2013年4月-2015年3月
高岡市万葉歴史館研究員
 - ・2015年4月
滋賀大学教育学部准教授

【主な社会的活動】

- 所属学会
 - ・萬葉学会
 - ・上代文学会(理事)
 - ・美夫君志会(常任理事)

【代表的な研究テーマ】

□ 上代日本文学における韻文の特質究明

課題解決に役立つシーズの説明

日本上代(飛鳥～奈良時代)の韻文の特質を究明することを研究の目的として、これまで、『古事記』に収録された歌謡と、歌集である『万葉集』に収録された大伴坂上郎女の作、及び作者未詳の長歌などを対象とした研究を続けてきました。いずれも平仮名誕生以前の作品で、やまとことばによる歌を漢字で表記するために種々の工夫が見られます。日本文学の淵源であるこれらの作品を対象として言語表現の展開をたどることは、日本の文化を特色づける和歌史研究の基盤となります。

西暦712年に成立した『古事記』には、神話が記されていることが広く知られていますが、訓字主体で表記された物語的部分の他に、万葉仮名を用い一字一音で表記された歌謡も収録されています。散文による事柄の叙述とは異なる役割を、歌謡という韻文が担い得たと判断されます。

一方、『万葉集』の場合は、時代による歌風の変遷や個々の作者の特色が看取されます。奈良時代の半ば頃、名門貴族大伴氏の女性として多くの歌を残した大伴坂上郎女は、恋や四季といった題材の他に、他の女性歌人には見られない主題を詠んでいます。例えば、娘がその夫の赴任先である越中(現在の富山県)に同行した際、離れて暮らす娘のもとに平城京から贈った長歌があります(「従京師来贈歌」巻十九・4220)。修辞を巧みに生かしつつ、娘を慈しんだ日々を回想し、離ればなれになってしまった苦悩を述べ、さらに、老いゆく身ゆえに再会がかなわないのではないかと案ずる母の心を、25句から成る長歌としてまとめています。ここに登場する娘の夫は万葉歌人として名高い大伴家持です。

これまで、『万葉集』の長歌に関する研究は、柿本人麻呂や山上憶良、山部赤人、家持といった男性歌人中心に構成されてきましたが、坂上郎女の研究を通して女性による創造という新たな側面を加えると共に、坂上郎女から家持へ継承される歌学びの貴重な例として検証することが求められます。

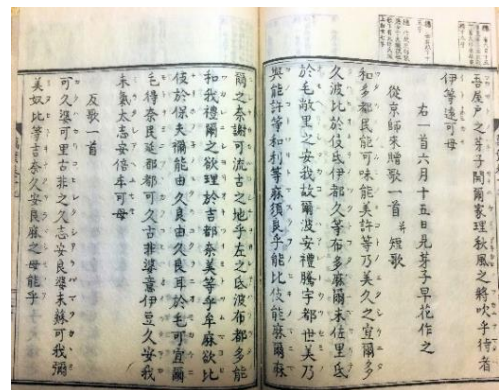
『万葉集』の時代には、本来、漢詩などで用いられた、「立春」や「白露」といった漢語を翻訳した「春立つ」や「しらつゆ」といった歌のことばが生み出されました。女性である坂上郎女の歌の中にも、漢語を受容した形跡が見られます。こうした女性による漢語の受容の実態について調査を進める予定です。

平安時代に入り、平仮名が誕生すると、中国の文学と和歌の距離が離れたかのように見えます。特に、女性たちは平仮名で表すことのできる概念のみを歌ったというイメージがあります。しかし、『古今和歌集』にも、やはり、漢詩文の表現をふまえた和歌が収められています。奈良時代から平安時代にかけての女性による和歌表現の連続性を見通すことが今後の研究課題です。

和歌の魅力の一つとして、歴史の中に生きた人々が見た風景を想像する手がかりになるという点を挙げることができます。滋賀県(近江国)は、『万葉集』の他、平安時代以降の歌集においても多くの名歌に登場します。こうした土地と和歌の関わりにも注目していきたいと考えています。

(画像)
大伴坂上郎女「従京師来贈歌」

(『万葉和歌集校異 十九』
文化二年(一八〇五))



企業・自治体へのメッセージ

滋賀県には、琵琶湖をはじめ和歌の舞台となった地名が多く残されています。それぞれの土地に縁のある和歌を学ぶ機運を高め、故郷の風土への理解を深めることのできるような方法を模索しています。